

妻と娘の罠にハマられて
女装マゾに堕とされた私 **3**

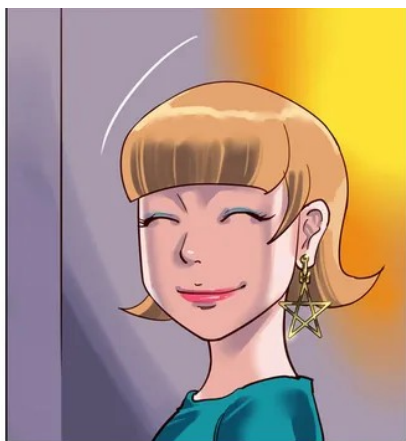
+おまけページ















かつての
同僚に
尻穴を
犯されて
どんな
気分だ？
ウハハハ

嬉しくて
泣いているのよね

ウフフフフ
この男は変態
だから、とても
喜んでいますわ
ねえマゾオさん

お前、女に改造されて
マゾ調教を受けている
らしいな
みっともない野郎だ

妻は私を女にたくせに
わざと私を男性扱いして
わずかに残っていた私の
男のプライドを粉々に
破壊するのです



そうすることで
私を惨めのどん底に
追い込むのです

私は地下室の鉄檻に監禁され
妻と娘、そしてイサオの
セックスマゾペットとして
飼われることになりました



44...





こんな朝から
モーニングミルクを
おねだりしているの？
欲張りなペットねえ

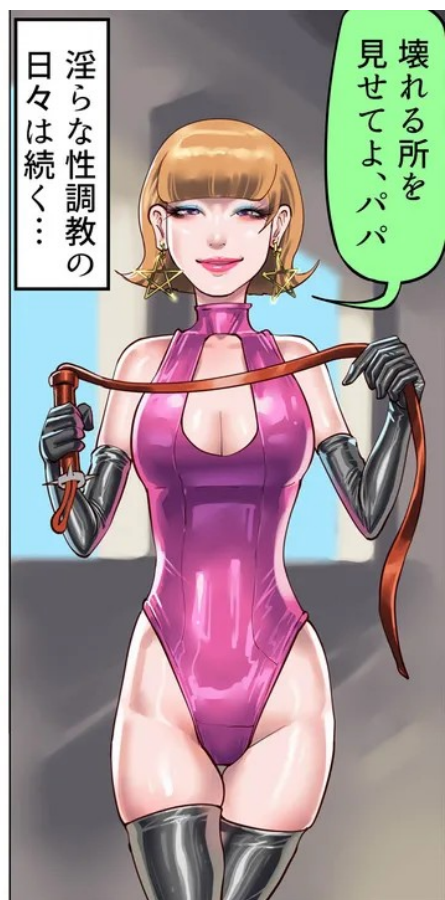
勘弁してくれよ
もう二発もごちそう
してやっただぜ

仕事はできないが
おしやぶりはなかなか
上手いじゃないか

女にされて
良かったな



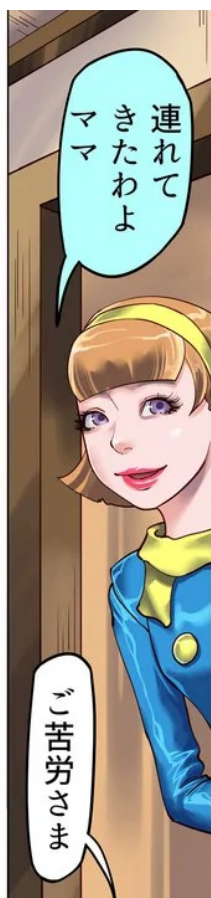
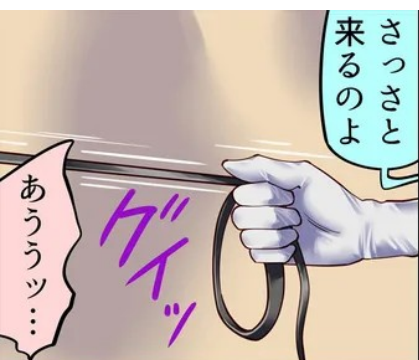
お前に
向いてるよ
アハハハハ



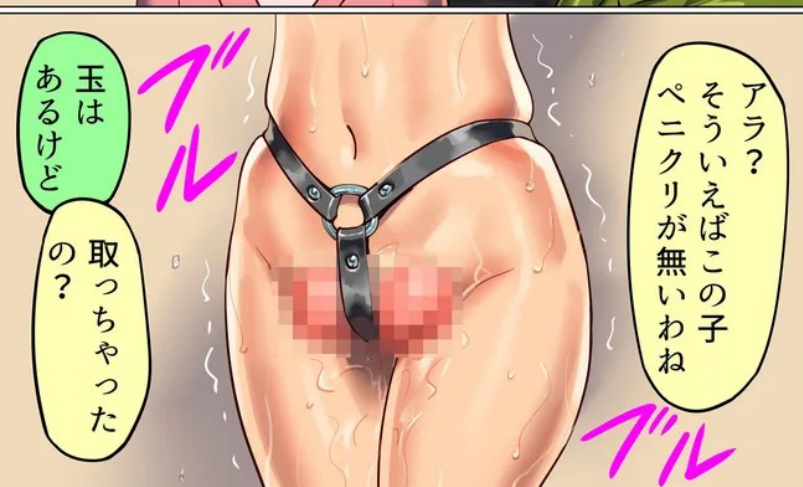
壊れる所を
見せてよ、パパ

淫らな性調教の
日々は続く…



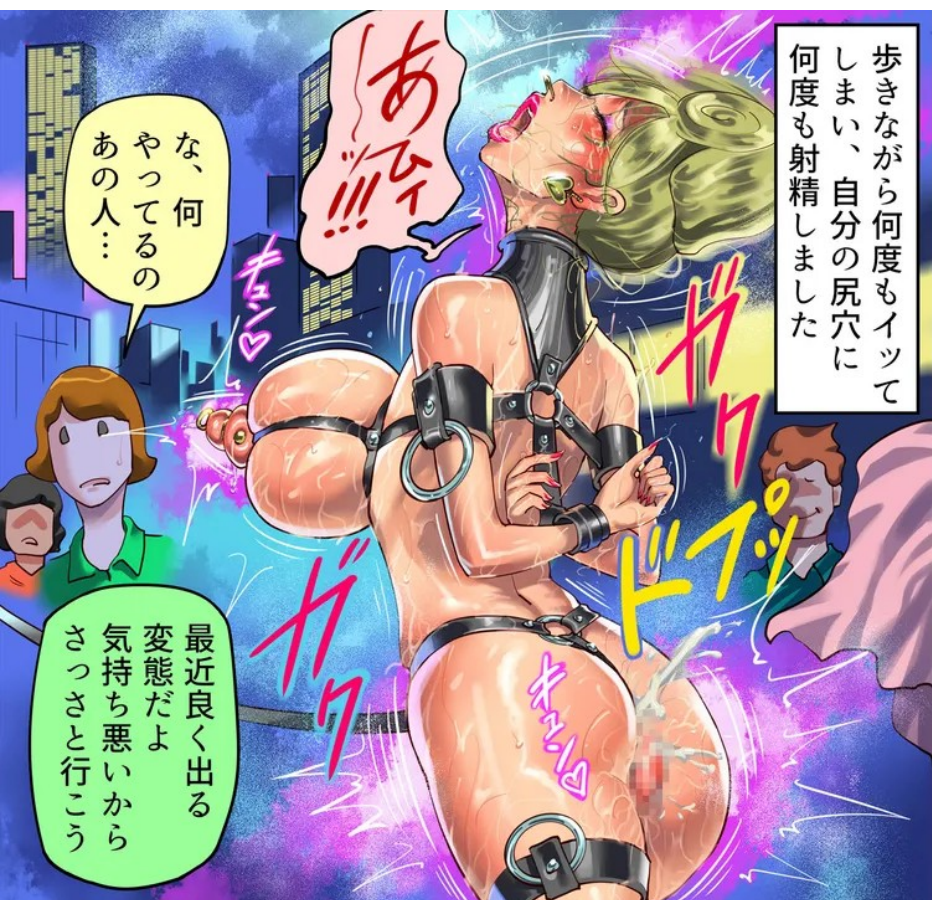


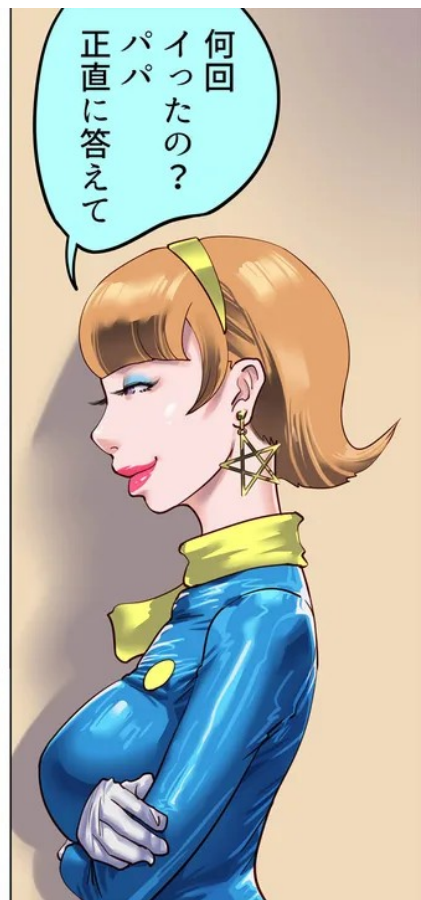




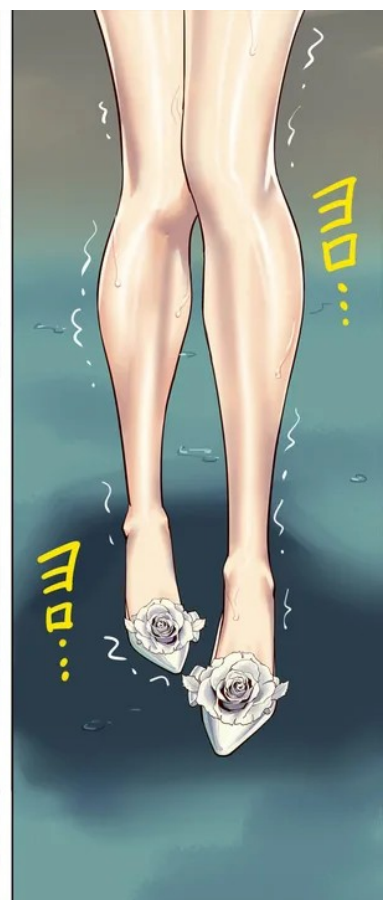












女性社員たちによる
言葉責め

自分のペニクリと
結婚って、どういう事？

女装おじさん
キモすぎ
るわよ

頭おかしいわ

ごめんなさい…
ごめんなさい…

変態変態
変態変態

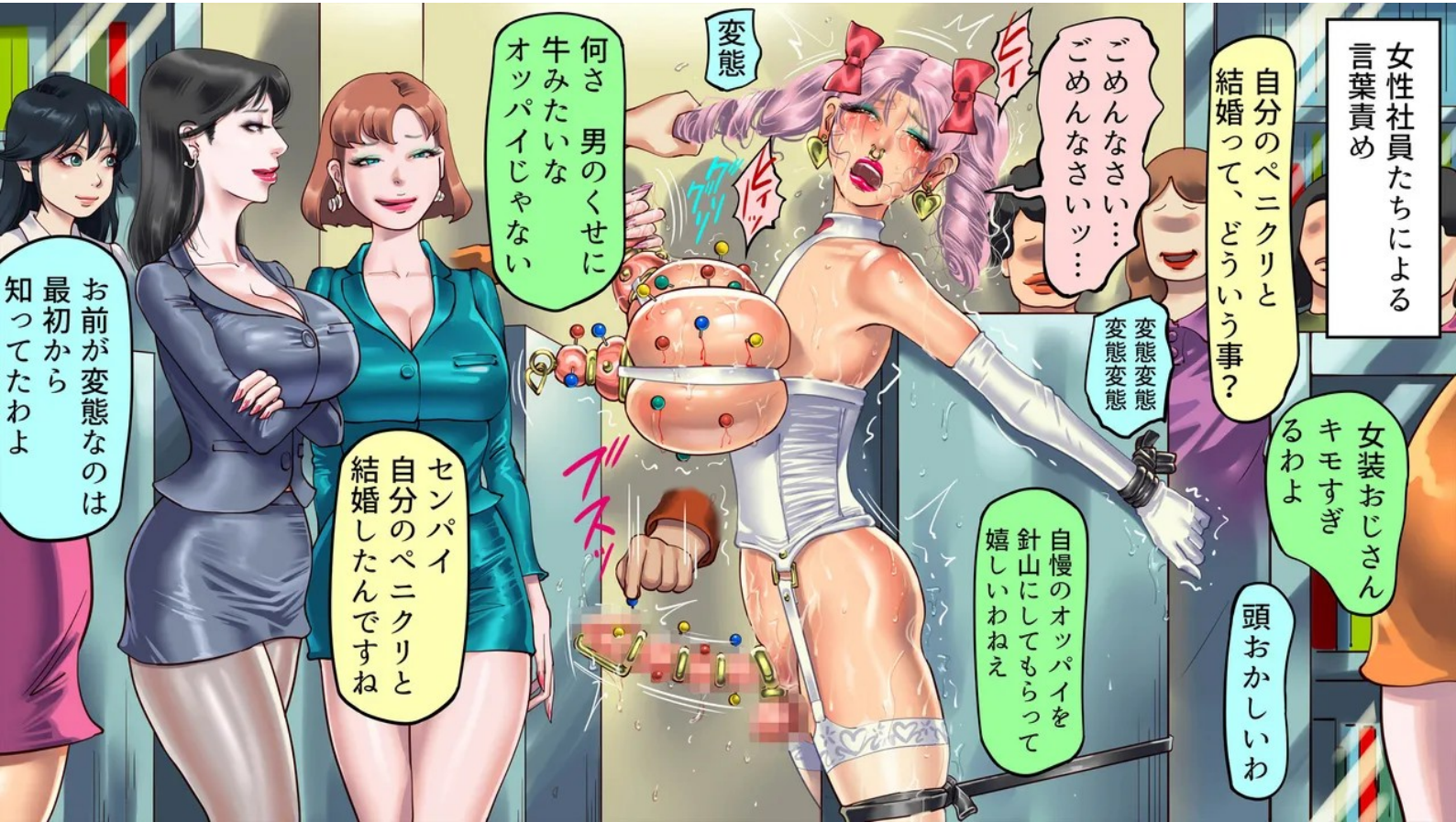
自慢のオッパイを
針山にしてもらって
嬉しいわねえ

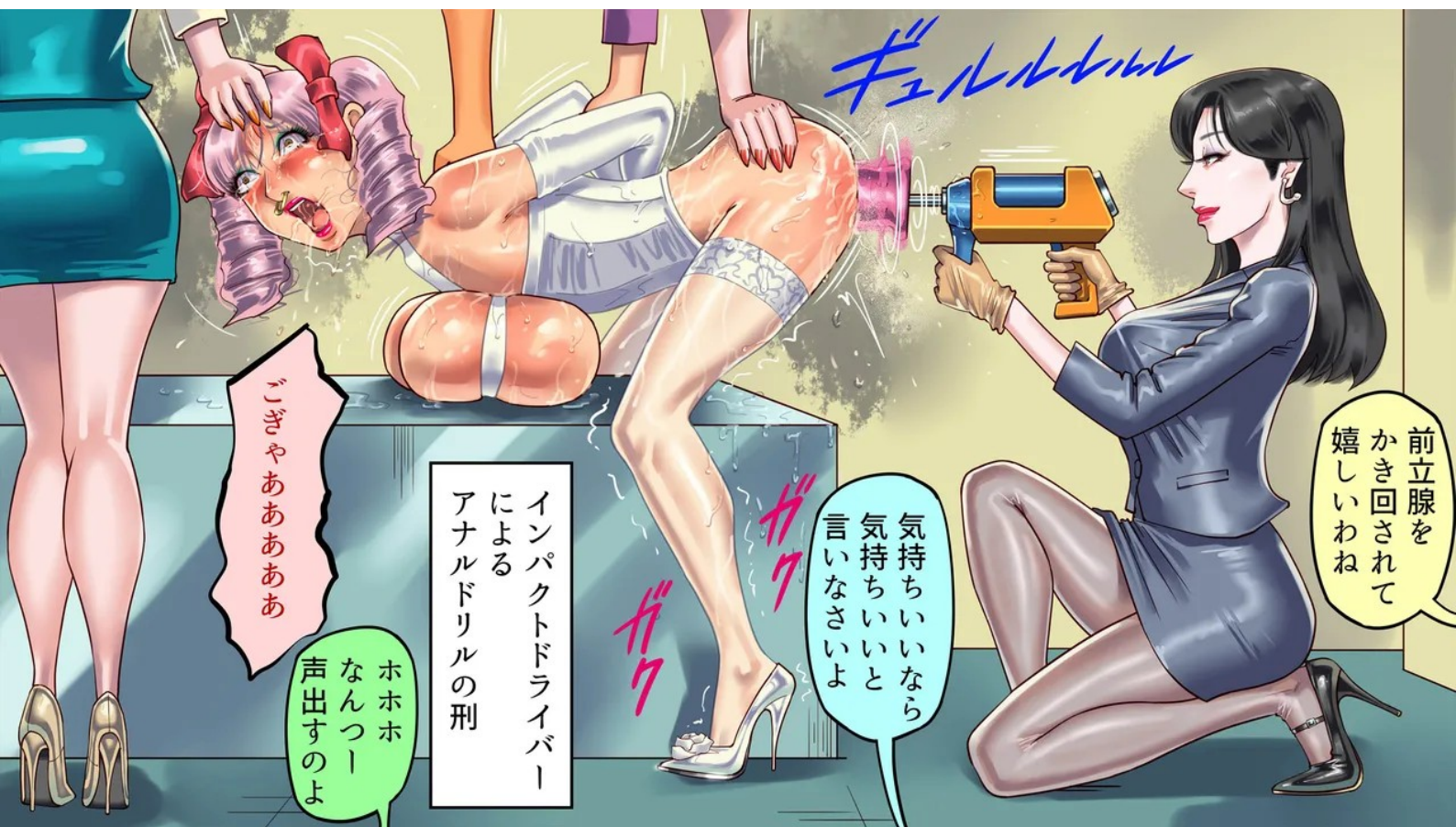
変態

何さ 男のくせに
牛みたいなの
オッパイじゃない

センパイ
自分のペニクリと
結婚したんですね

お前が変態なのは
最初から
知ってたわよ





男性社員らによる
輪姦シヨウ

変態野郎！

ぐへへ
けっこう
カワイイじゃん

俺達のこと
も
そういう目
で
見ていたんだ
ろう

チ○ポも
しごいて
あげよう

仕事はできないが
おしゃぶりは
うまいじゃないか









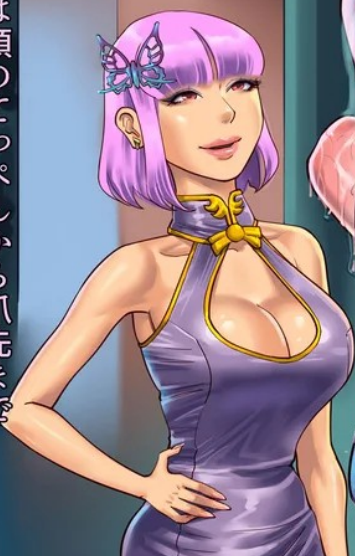


おまけ
ページ

天狗衆のアジト。薄暗い地下拷問牢…
部屋の中央で、花の蕾のような形をした、ピンク色の
巨大な肉塊がウネウネと蠢いている。
階段を降りてきたのは、クノイチのあかねだ。
あかねの指示で天狗衆が何かを操作すると、巨大な
肉塊の上部がパツクリと割れて、中から全裸の女体が
ズルズルと引きずり出された。
あかねの計略で拉致監禁され拷問を受けている
風の巫女、緋葉であった。



緋葉の真っ白な肉体は頭のとっぺんから爪先まで
ドロドロとした粘液にまみれ、ヌラヌラと光っている。
「くくく、新開発の魔法生物の責めはどうだったかしら。
イソギンチャクを改造した、女体責め専用の化け物よ。
その様子だと、さぞたっぷり可愛がってもらった
ようねえ」



緋葉は前目の夜から、その肉塊の胎内に閉じ込められ、一晩中、凄絶な快楽責めを受けていたのだ。ぴつちりと閉じたヌルヌルの胎内で一切の身動きを封じられたまま、何百という無数の触手に全身の性感帯を刺激されるのだ。触手は緋葉の全身の穴という穴からも侵入し、肉体の内部からも淫りで強烈な刺激を与えてくる。



並の女ならあつという間に絶頂に達し、快楽で
狂い死んでしまうだろう。

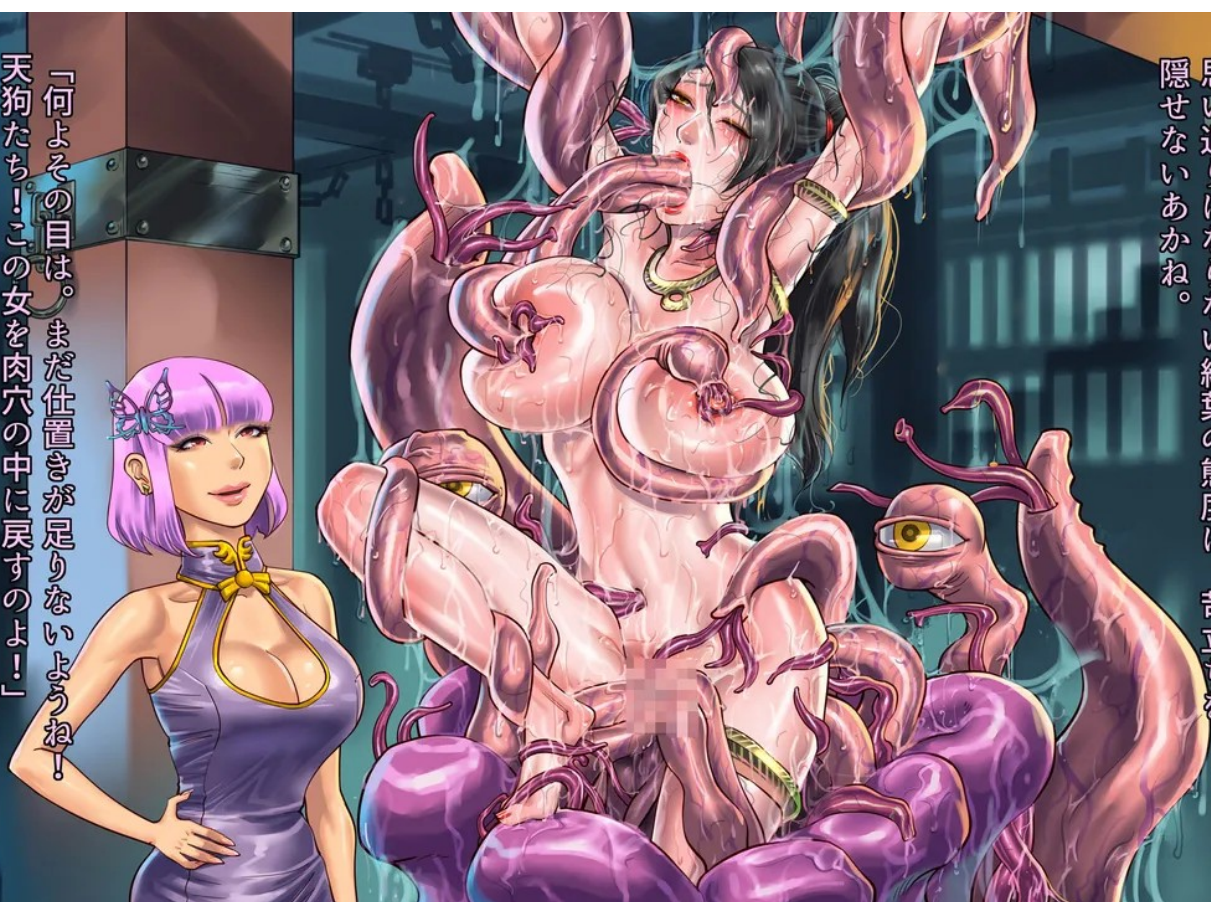
厳しい訓練を受けた巫女だからこそ、かろうじて
耐えられたのだった。

触手に釣り上げられた緋葉の裸体からはほのかに
湯気があがり、白肌は朱に染まっている。

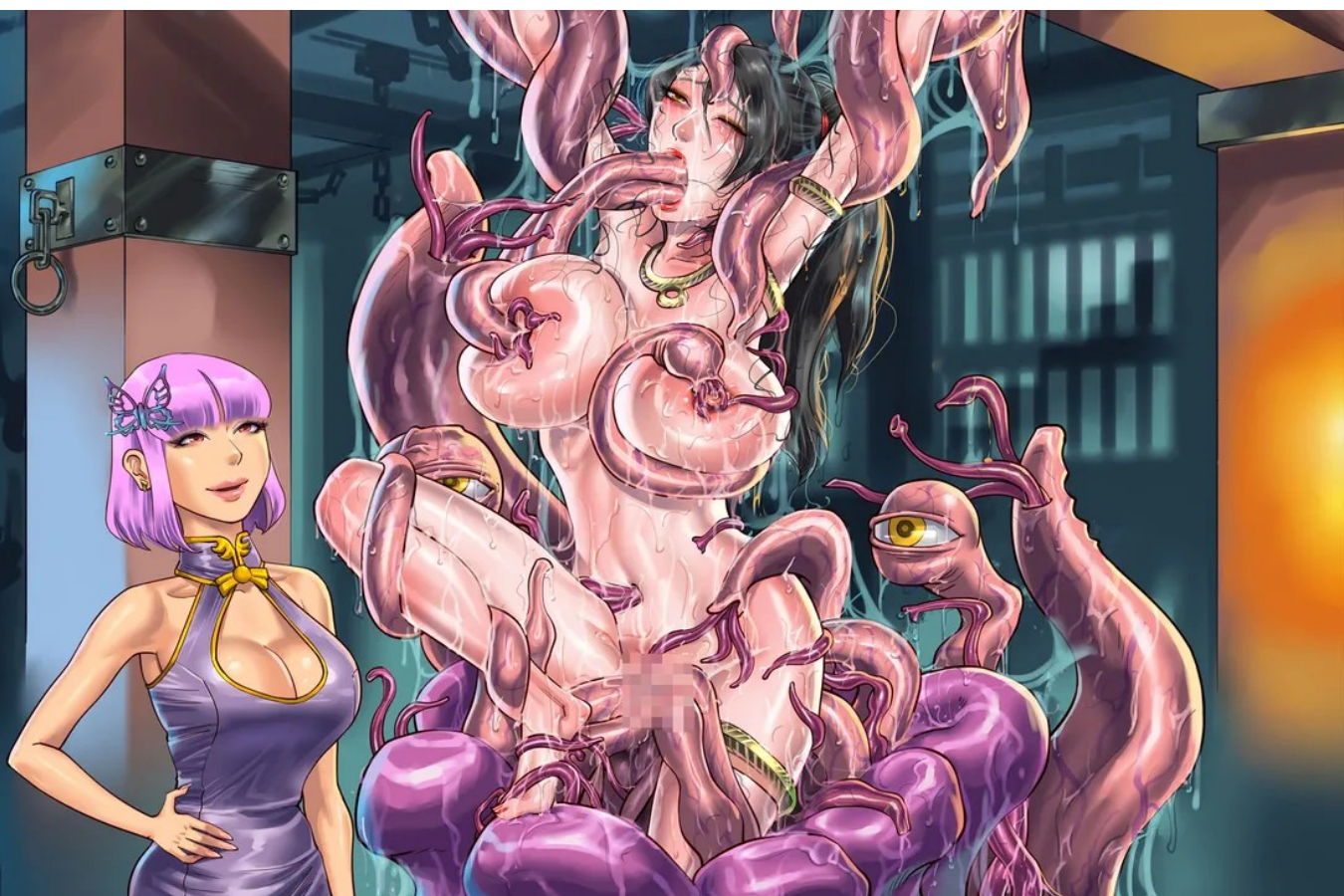
焦点の合わない虚ろな目が、責めの激しさを
物語っていた。

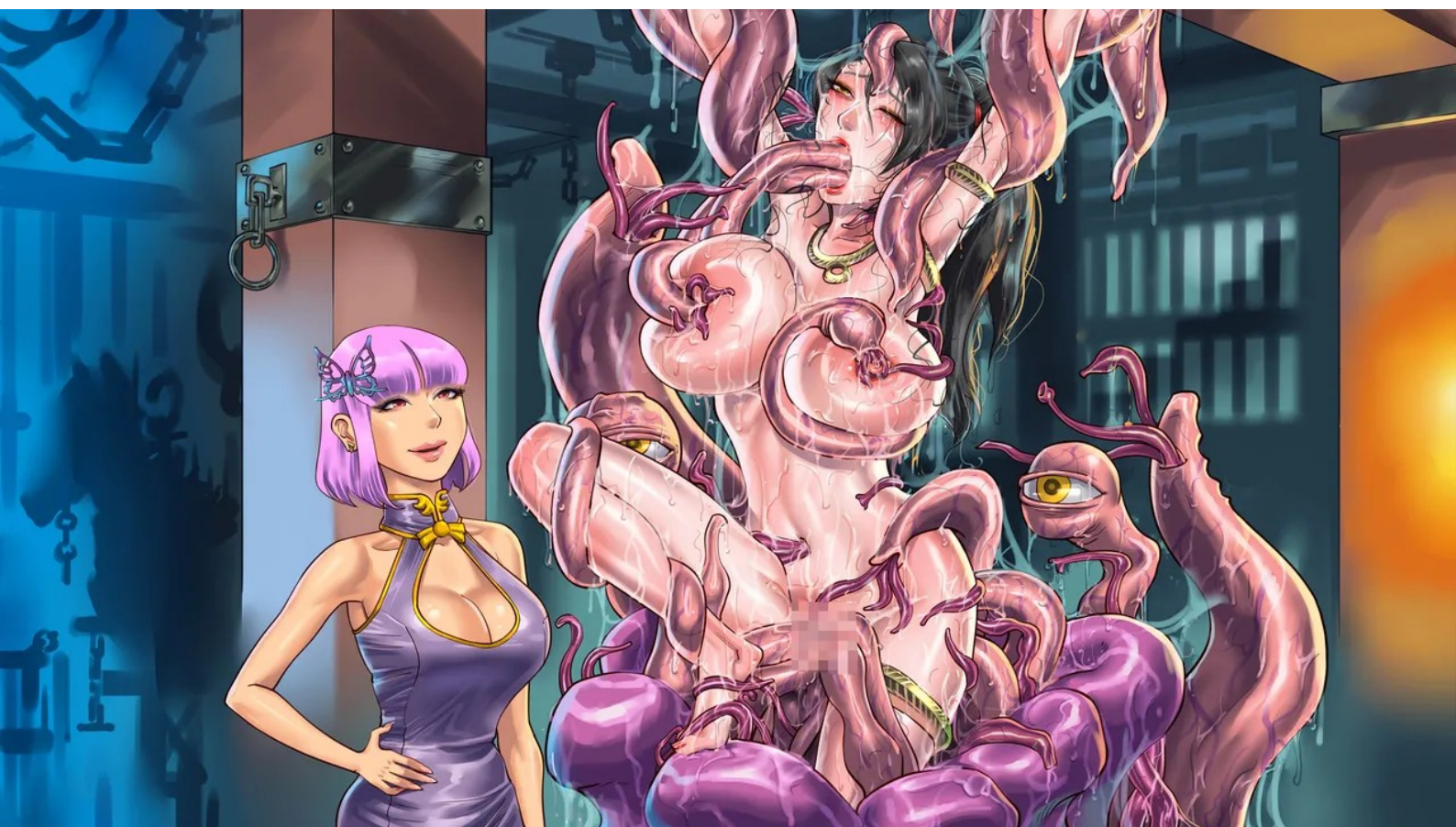
しかし、あかねを冷ややかに見下ろすその目は
屈服の色ではなかった。
思い通りにならない緋葉の態度に、苛立ちを
隠せないあかね。

「何よその目は。まだ仕置きが足りないようね！
天狗たち！この女を肉穴の中に戻すのよ！」
「しかしこれ以上の責めは…
死んでしまおうと思いませんぜ…」
「うるさいわね！もっと激しく責めるのよ！
あの怪物に興奮剤を打って！
あの女に倍の責め苦を与えなさい！」



ヒステリックなあかねの一言で、緋葉の裸体は再び肉の牢獄の中へ吸い込まれていった。
「ヒヒヒ。どうせお前は二度とここから出られないのよ。化け物の臓物の中で、せいぜい好きなだけ苦しみ抜くがいいわ」





典子と彩は、お店の休暇をもらって、別荘に避暑旅行に来ていました。
「ちよつとおっぱいが大きいからって調子にのらないでよね。
このみつともない乳牛め！
ボクのムチでお仕置きしてあげる」

ピシッ！ パシッ！
典子女王様のハート型のムチが振り下るされます。

「ヒイッ！いい、痛いッ！
お、お許してくださいませッ……！」



「彩さんはプレイが乱暴だから、お店のみんなも陰で悪口言ってるよ。」
「彩さんの相手をしてあげるのはボクだけだよ。」
「ボクのことは王子様とお呼び！」
緊縛された彩の裸体をムチの先端でなぞりながら、嫌な言葉責めをする典子なのでした。

「は、はい典子王子さま。
彩は典子王子さまのオモチャです。
どうぞお気の済むまで、
彩のいやらしい身体を
めちゃくちゃに虐めて下さい…」
マゾヒズムの奥深い快楽を存分に味わいながら、
彩は典子が気に入るような、
甘い屈服の言葉を吐くのでした。





「さつきは良くもやってくれたわね。さすがのわたしも死ぬかと思ったわ。たっぷりお返しをさせてもらおうわよ」
「誰が王子様よ。スケベで淫乱な、マゾ猫のくせに」
「はぁんッ…ご、ごめんなさいお姉様…ぼく、調子にのっちゃいました」



「謝っても遅いわよ ククク、私の責めは容赦ないからね。涙と悲鳴が枯れるまで、いじめ抜いてあげるわ」
「まずは典子のだるい好きな、微弱電流による全身ドライアクメ調教よ」

「典子の可愛いペニクリにも、乳首にも、ケツマ〇コにもビリビリのいやらしい電流が流れちゃうのよ。」

「イキたくてもイケない、地獄の電気責めで、気が狂うまで可愛がってあげる」

手にしたムチの先端で典子のアヌスに挿入された電極をベチベチと叩きながら、彩は典子の耳元に、ねっとりとした言葉責めをささやくのです。



「その後はロウソクと大量浣腸で、たっぷり

気を失うまで責め抜いてあげる」

「明日の朝までウレンチさせてあげないわ。典子は今夜一晩中、浣腸のむごい快楽にのたうちまわるのよ」

「あぁ〜んッ… そ、そんなッ…♡ゆ、許してえ…♡」

典子は口では許しを請いながらも、その瞳は、これから始まる

残酷で甘美な、被虐の宴の予感に、妖しくも潤みはじめているのです。



その後の慶子は、表向きはタレント業を続けながら、裏では高級アナルマゾ娼婦として生活していた。週に数日、後援会の指定する場所で、後援会のメンバーを相手に変態SMシヨウを演じ、客を取らされるのだ。

慶子の人気はすさまじく、噂を聞きつけた男たちが続々と入会したため、「護台場慶子後援会」のメンバーはいまやパンク寸前であった。そのため、近頃はゲストを招いてシヨウを行うようになっていた。

今夜の舞台はエネマアヌス病院、地下実験室だ。この冷酷な舞台は慶子を怯えさせるので、メンバーから特に人気があった。

今夜のゲストはエミコという女性だ。なんでも、どこかのマンシヨンで住人たちの「共用マゾペット」として監禁飼育されているらしい。「世の中には、私と似たような境遇の人が居るのね…」と慶子は胸が暗くなる思いだった。

「ジユプ…むぐ… んぐウツ…!」

「ううっ!…ふう… こりやたまらん。慶子さん、素晴らしいテクニクだねえ」

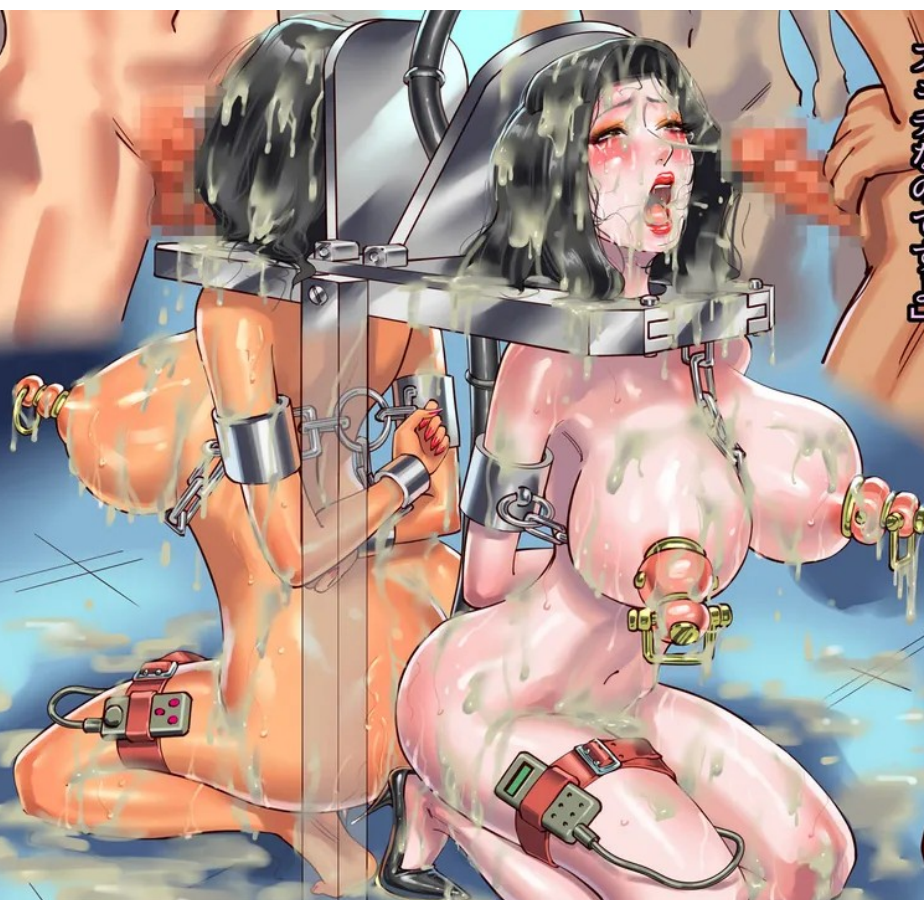
「フフフ、毎日のように数人がかりで調教してますからな、おしゃぶりはそこのベテラン風俗嬢にも負けませんよ」

地下実験室にはむせ返るような淫風が吹き荒れていた。鋼鉄製の拘束台に、しゃがんだ格好で背中合わせに拘束された、二人の全裸の美女のまわりを、10人以上の野卑な男たちが取り囲んでいる。男たちはまるでトイレの順番待ちのように並び、二人の美女にフェラチオを強要しているのだ。

もう随分前から行われているのか、二人の裸の美女の全身は男どもの吐き出したザーメンでベトベトに汚れていた。

「全裸にハイヒールとは、なかなかエロチックな格好ですな」

「院長の趣味でしょね、院長は重度のハイヒールフェチなのですよ」



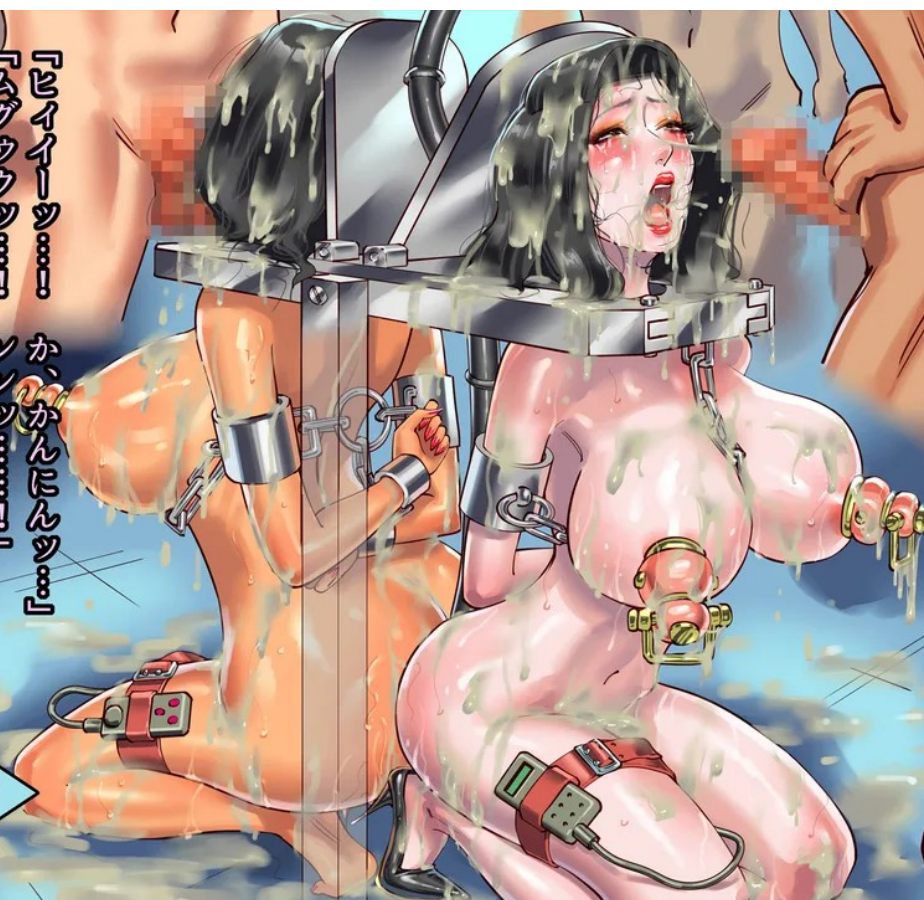
「ひひひ、便器に見立てた拘束台を作ってみました。面白い趣向でしょう」

「先生も残酷な方だ。プライドの高い一流女子アナを便器扱いにするとは」

「なあに、この女どもは真正マゾですからな、恥ずかしい目に遭わせられるほど興奮して悦んでおるんですよ」

「上から浣腸のゴムチューブが伸びているでしょう。
一人射精させるたびに、相手のアヌスに一定量の
浣腸液が注ぎ込まれる仕組みになっています。
先にこらえ切れなくなつて漏らした方の負けです。
みなさん、それぞれに賭けているというわけです。」

「ヒイーツ……! か、かんにんツ……!」
「ムグウツ……! シンツ……!」
太腿のベルトに取り付けられたおぞましい
機械によって、クリト○スにむごい
電気責めをされているのだ。
全身を精液と涙とよだれと脂汗に
まみれさせながら、二人はいつ終わる
とも知れない、地獄のSMシヨウを
続けるのだった。



エミコが一人を射精させ、浣腸液が慶子の直腸内に注ぎ込まれた。

「ううむツ……!! ゆ、許して下さいまし……も、もう我慢できませんわツ……」

「情けない女だ! 日頃あれだけ熱心に調教してやっているというのに!」

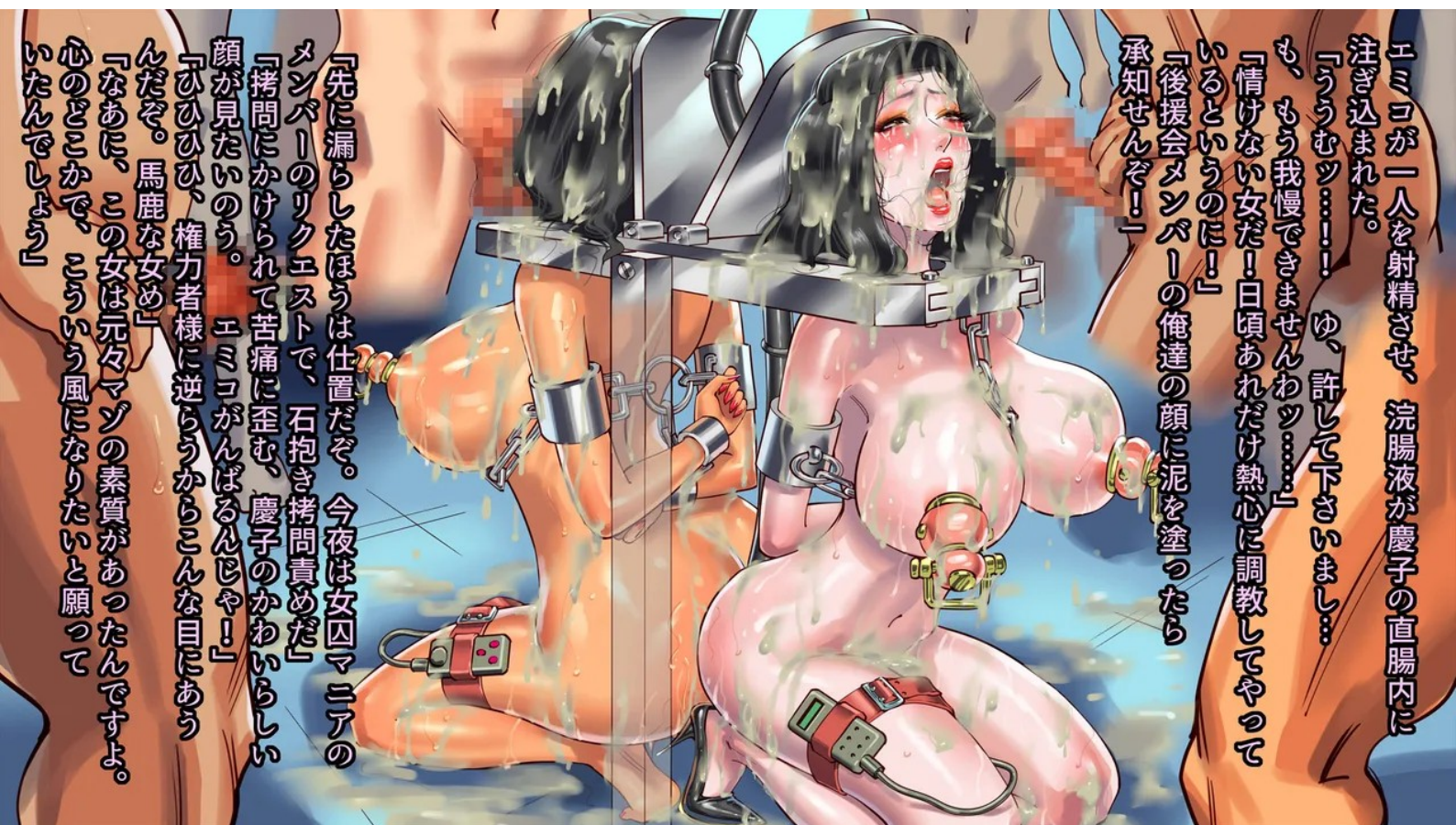
「後援会メンバーの俺達の顔に泥を塗ったら承知せんぞ!」

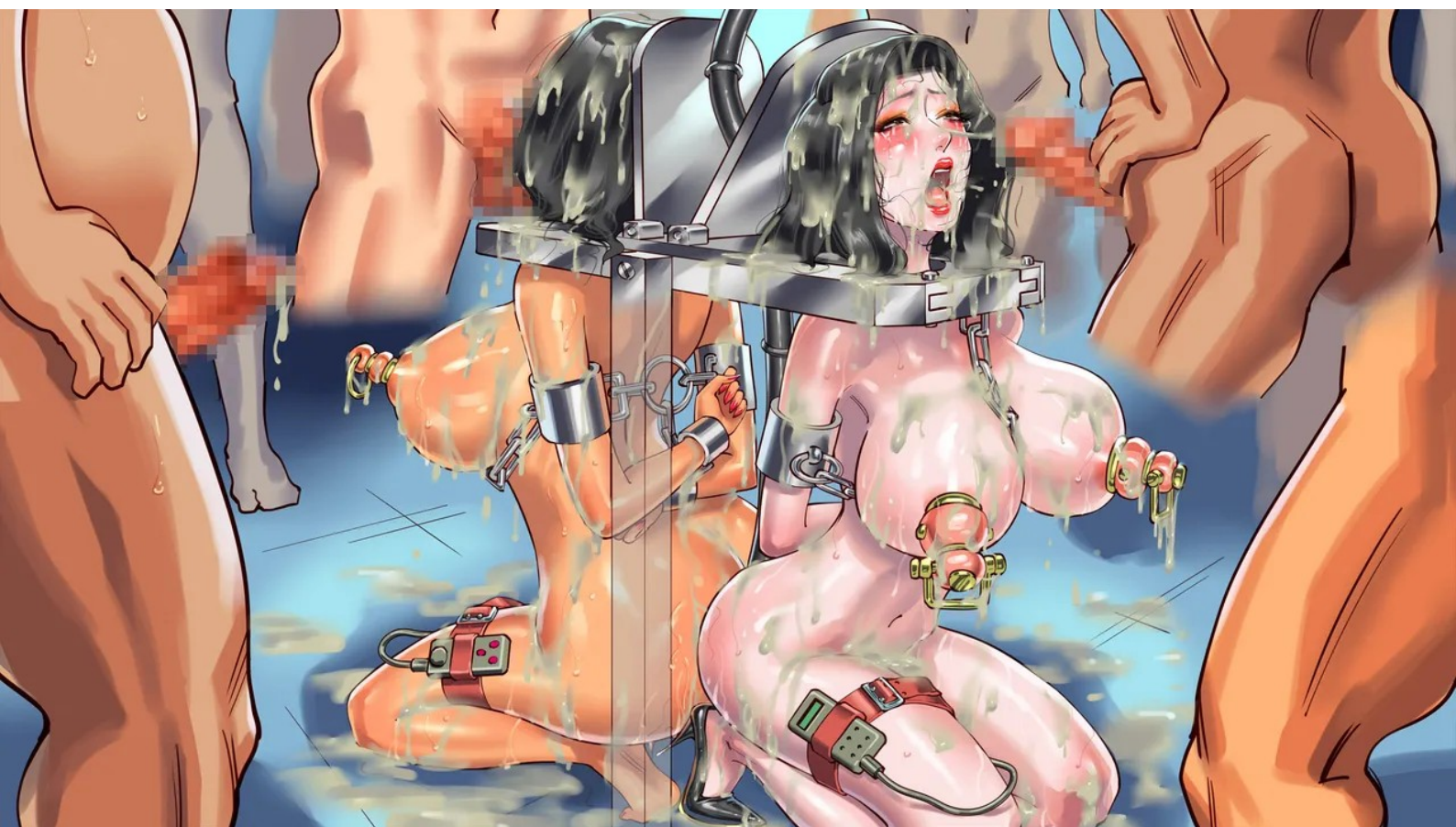
「先に漏らしたほうは仕置だぞ。今夜は女囚マニアのメンバーのリクエストで、石抱き拷問責めだ!」

「拷問にかけられて苦痛に歪む、慶子のかわいらしい顔が見たいのう。エミコがんばるんじや!」

「ひひひひ、権力者様に逆らうからこんな目にあうんだぞ。馬鹿な女め!」

「なあに、この女は元々マゾの素質があつたんですよ。心のどこかで、こういう風になりたいと願っていたんでしょ!」





さんざんに責められ、泣き喚かされたあと、二人は風呂に入らされた。

身体を清め、黽られ化粧を直してから、

陰惨なSMシヨウの第二幕の幕開けである。

大量の浣腸が何度も繰り返され、そのたびに哀れな生贄の喉から悲鳴と呻き声がほとばしった。

クライマックスはフィストファックだ。

どちらがよりたくさん入るか、競争させようというのだ。

天井から伸びた太い鎖に、二人は首輪を繋がれた。

「ひいッ…こ、こわいっ…許して…」

慶子はなんだかそのおぞましい調教を受けてはいたが、その苦痛と屈辱に、とても慣れることができなかった。

慶子の雪のように白い美尻の中心部に咲いた

可憐なアヌスに、男どもの野卑な手が

次々と伸びてくる。



「ううむッ…！ つ、つらいッ…か、かんにんッ…」

男の手が侵入してくるおぞましい感覚に、慶子は呻いた。

「ああッッ！ ひい… い、いれないで… ひぎいいッ！」

「これが慶子の内臓の中か…ぐふふ、たまらんのう」

「健康なサーモンピンクじゃ。

温かくてつるつるしておる」

「ホレ、尻穴は皆様にまかせて

二人でレズり合わんか」

向かい合わせに拘束されたエミコの尻穴にも、

男たちの手が次々と差し込まれている。

だがエミコはどこか余裕のあるウツトリとした表情で、

肛虐を受け入れていた。



「あなたもずっと…こんな目に？」
「ええ…もう、ずっと…」

江身子の受けてきた調教は、慶子のそれを遥かに超えていた。
もう一年以上もマンションに監禁され、江身子は毎日休むまもなく、鬼畜のような住人たちに責められ続けていたのだ。

近頃ではマンション外の人間たちも調教に加わり、この美貌のソプラノ歌手を、徹底的なマゾに堕とすべく、ありとあらゆる責めや恥辱を、彼女に与え続けてきたのだった。
江身子の目は、もう完全にマゾの淫獣だった。
「ああッ… もっと、もっと江身子を、めちやくちゃにいじめて…」



「だらしないぞ慶子！エミコを見習わんか！」
言いながら男たちは、蝋燭のしずくを慶子の尻に垂らす。
「ひぎいーッ！！」 あ、熱いッ！」
「負けたほうは皆様に見られながら、
鋼鉄の分娩台のうえで肛門解剖実験じゃぞ！」

「ねえ… 慶子さん、キスして…
この人たちからは逃げられないのよ…
それなら、せめて楽しませようよ」
（ああ… もうこの運命からは逃れられないのね…）
慶子は諦めたようにうなずくと、やけになったように
江身子に唇を重ね、乳房をこすり合わせるのであった。



おまけページ関連作品

- ・巫女監禁○問
- ・女体化マゾ娼婦・彩 恥辱のコスチューム
- ・射精管理された女装マゾ人形・典子はママの変態尻穴露出奴○
- ・奴○飼育マンション
- ・墮とされた美人キャスター・慶子

お買い上げありがとうございました！m(_ _)m
今作はいかがだったでしょうか。
ご感想やリクエストなどございましたら、
ホームページにお寄せください。
販売サイト様へのレビューも嬉しいです。
ありがとうございました！

ホームページ Ci-en（シエン）
<https://ci-en.dlsite.com/creator/4881>

2025年8月 納屋

本作に登場するプレイ等は
すべてフィクションです。
決して真似をしないで下さい。